

# 近衛天皇陵多宝塔の仏像

阿弥陀如来像  
大日如来像  
について

伊 東 史 朗

京都市伏見区竹田内畑町にある近衛天皇陵（安楽寿院南陵）に建つ多宝塔の中には、内陣の厨子内に阿弥陀如来坐像が、またその前の壇上には大日如来坐像が、それぞれ安置されている。本稿は、宮内庁書陵部からの依頼によるこれら二像の調査の結果報告と、それに、両像を歴史上正しく位置づけるに当っての必要な見解を加えたものである。調査と撮影は平成八年十月十七日に行われ、人員は次のとおりである。

調査

伊東史朗（京都国立博物館資料調査研究室長）

撮影

金井杜男（京都国立博物館専門職員）

三原 昇（補助）

## 一 現状の概要

阿弥陀如来坐像

光背・台座の備わる阿弥陀如来像である。本体・光背・台座に分け

て、形状と構造を細かく見ていこう。

阿弥陀如来像の本体は、螺髪（彫出）・肉髻珠・白毫（ともに木製、嵌入）をあらわし、耳朶環状、頸部に三道を刻む。衣を偏袒右肩に着し（右肩にも衣が少し懸かる）、右手を屈臂して胸前に構え、左手は左足上に載せ、いずれも第一・二指を捻じ（いわゆる来迎印）、右足外に結跏趺坐する。なお着衣法と直接かかわりはないが、両脚部中央に、衣がエプロン状に垂れる形式にも注意する必要がある。

光背は二重円相に周縁と光脚の付くもので、二重円相部は内区と外区に分けられ、内区の頭光は八葉蓮華（間弁付き）、身光は無文、外区はいずれにも放射状に溝が切られる。周縁部は透彫りの唐草文で、その中に十三個の月輪形（蓮台付き）が配される。光脚は蓮華形で、弁の中は無文。

台座は、上から蓮華・上敷茄子（反花付き）<sup>かえりばな</sup>・華盤（上に蕊、下に框付き）・下敷茄子（八角、反花付き）・受座・反花・上框（二段）・下框（反足付き）という構成の八重蓮華座である。華盤の表・裏と反花に宝相華

文様が浮彫りされる。

いずれも木造（ヒノキ材）であるが、以上の各部のうち、光背のすべで、台座の華盤・反花・上框を除く各部はいずれも後補なので、当初部分だけについての木寄せ構造を、昭和九・十年年度修理の報告書と、安置状態のままでの今回の観察をもとに、次に記述する（細かな後補部分はあとにまとめて記す）。

本体は寄木造、漆箔、彫眼。頭部と体部は正中と側面でそれぞれ矧ぎ寄せ、さらに頸部下方でその両部を矧ぐ（割矧ぎかどうかの判断はできなかった）。右手は肩・臂・手首で矧ぎ、左体側部（肩―左腰脇）を体部に寄せ、さらに左袖先・左手首先を矧ぐ。右腰脇部・両脚部・裳先を矧ぐ。内刳りを入れ、底板を貼る。漆箔仕上げ。

台座華盤は四材を矧ぎ、反花と上框はそれぞれ八方矧ぎ寄せ。漆箔仕上げ。

後補部分は、本体では肉髻珠、白毫、裳先、底板、および光背のすべで、台座では蓮華、上敷茄子（反花付き）、華盤の下に付く框、下敷茄子（反花付き）、受座、下框（仮足付き）、および各部表面の漆箔などである。これらは天文二十二―二十三年（一五五三―五四）の修理時のものが多いけれど、それがふたたび損傷・解体状態となっていたのを現状のように復元したのが、昭和九・十年の修復事業であった。したがって当初の作と推定した部分でもこの時の補修の手が入っていると見なければならず、また昭和時の完全な新作部分もある。

大日如来坐像

光背・台座・天蓋の完備する大日如来像である。

本体は、頭髮を宝髻に結び、天冠台を被る。現状では後補の宝冠と冠繪（銅製）を付ける。白毫（水晶製）をあらわし、耳朶環状、頸部に三道を刻む。上半身に条帛、下半身に裙（腰で折返し）と腰布を着し、胸飾・臂釧・腕釧（以上銅製）を付ける。両手先は胸前に構え、左手第二指を右手で握り（智拳印）、右足外に結跏趺坐する。

光背は二重円相に周縁と光脚の付く拳身光。台座は、蓮華・上敷茄子・華盤（下に框付き）・下敷茄子（獅子形）・受座・反花（蕊付き）・框・反花・框・下框（二段、格狭間・仮足付き）という構成である。天蓋は八葉蓮華形。

以上のうち、光背・台座・天蓋は後補なので、本体だけについて、その木寄せ構造を記述する。

木造（ヒノキ材）、一木式割矧造、漆箔、彫眼。頭・体の根幹部を一枚から彫出し、両耳半ばの位置で前後に割矧ぎ、また頸部三道下でさらに割矧ぐ。両手は肩・臂・手首で各矧ぐ。両腰脇部、両脚部、裙先を各矧ぐ。全身に内刳りを入れ、ノミ目を平滑に凌える。頭髮部は群青、宝髻の括り紐は朱に彩り、天冠台・肉身部・着衣部は漆箔。内刳り面は黒漆塗り。

後補は、宝冠、冠繪、白毫、胸飾、臂釧、腕釧、裙先、表面の漆箔な

どである。

なお像内背面に木札（内削りの曲面なりの不定形）が釘打ちされ、表面に次の墨書が認められる。

慶長七年十二月吉日

奉再興越前国前場半入敬白

山科進藤

極楽付

## 二 製作時期とその背景

久寿二年（一一五五）七月二十三日、十七歳で崩御された近衛天皇の遺骸は、八月一日に船岡で火葬に付され、翌二日、遺骨が知足院に安置された（『兵範記』）。それから八年後の長寛元年（一一六三）十一月二十八日、その遺骨は、鳥羽東殿にすでに築かれていた美福門院のための塔に移し納められる（『百鍊抄』）。この塔の後身が、現存する近衛天皇陵の多宝塔である。

鳥羽東殿全体の造営と、その中に築かれた鳥羽天皇陵・近衛天皇陵およびその上に設置された二基の塔について、次にやや詳しく説明をする。

鳥羽東殿は、保延三年（一一三七）十月十五日に鳥羽法皇により供養された御堂（『百鍊抄』）が最初の施設で、安楽寿院と号され、本尊は阿弥陀三尊像であった（『本朝文集』所収「不動堂供養願文」）。この御堂

には別に御所が付属していたのだが、さらにこれに、保延五年（一一三五）二月二十二日、三重塔一基が加えられたのである（『百鍊抄』）。

御堂・御所・塔が核となった安楽寿院には、そのうち、保延六年（一一四〇）に炎魔天堂、久安三年（一一四七）に九体阿弥陀堂、久寿二年（一一五五）に不動堂が設置され、また最近の発掘結果によれば苑池も広がっていたらしい。

この地に鳥羽法皇が崩御したのは、保元元年（一一五六）七月二日のことであった。遺骸は一定期間別のところに置かれることはなく、御遺詔によりすぐに塔に移された。『兵範記』同日の条に、

今日申剋、法皇崩御於鳥羽安楽寿院御所、春秋五十四……入夜御入棺……次奉移御塔

とあるように、法皇は安楽寿院の三重塔に葬られたのであり、これが生前から葬塔として用意されていたことは明らかである。安置の仏像が何かについて語る古い記録はないものの、近世編纂の『安楽寿院由緒書』をはじめいくつかの寺誌・地誌類には、等身の阿弥陀如来坐像だったと記す。

ところでこの鳥羽天皇陵に隣接して、皇后美福門院のための御陵が築かれ、そこにも塔が建てられていた。しかしそれにもかかわらず、永暦元年（一一六〇）十一月二十三日の崩後、美福門院の遺骨は高野山に葬られたのである。『山塊記』同年十一月六日条に

美福門院御骨奉渡高野御山、依御遺言也、而鳥羽東殿故院令起立御

塔二基、御一基被納故院御骨、今一基此女院御料也、然而可置高野之由有御意趣云々

とあり、その間の事情を説明している。そして長寛元年（一一六三）、八年前に崩じた近衛天皇の遺骨がここに埋葬されたことは前記のとおりである。

近衛天皇陵の塔が、三重塔だったかまたは現在と同じ多宝塔だったかは、文献には明記されない。またその建立時期にまで言及する古い史料もないのだが、杉山信三氏は、鳥羽法皇崩後で、藤原俊憲（信西の子）が「鳥羽御塔行事賞」により従四位上に叙せられた（『公卿補任』）保元三年（一一五八）あたりを、有力な候補として挙げている。ところが『安楽寿院由緒書』には、何に依拠したものか、保元二年十二月二日、信西を奉行としてこの塔が供養されたことが記される。この記事を生かすならば、先の叙任はこれを受けてのことだろう。

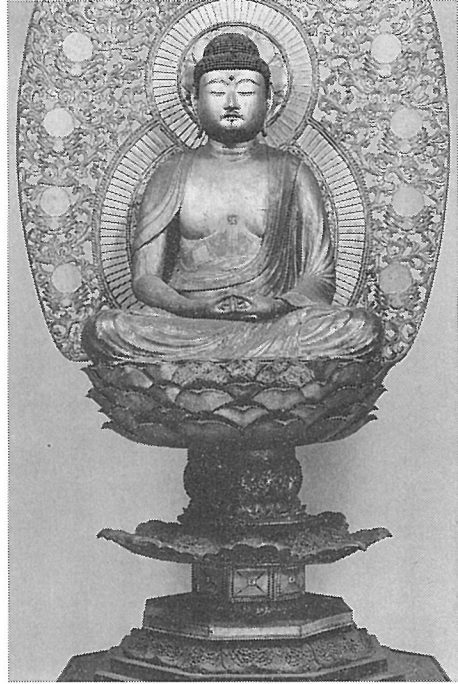
近世には鳥羽天皇陵の塔を「本御塔」、近衛天皇陵のそれを「新御塔」と称すようになった（以下この呼称にしたがう）。『安楽寿院由緒書』は両塔の本尊をそれぞれ「坐像等身之阿弥陀如来」と表現している。現在安楽寿院に安置される阿弥陀如来像は、その台座心棒にある天文二十三年（一一五四）の修理銘に「本御塔」とあるので、これこそ、かつて鳥羽天皇陵の三重塔（本御塔）に置かれていた像に当る。一方、近衛天皇陵の塔（新御塔）に現在でも安置される像は、銘文等の存在が未確認であるにせよ、当初からここにあったことを疑う余地はない。

したがってここで報告している近衛天皇陵の阿弥陀如来像は、新御塔の本尊として、保元二年（一一五七）頃に造立されたことが確定できるのである。

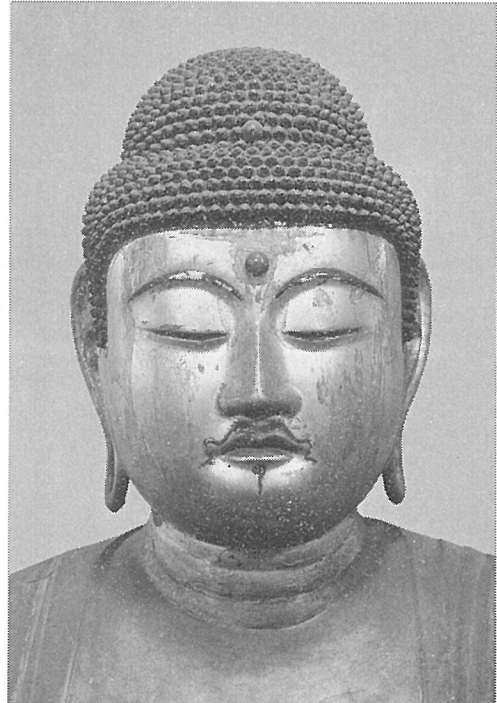
他方、この像の前に、あたかも前立のように置かれる大日如来像は、安置状況からして当初からのものとはみなされず、ここに置かれる前の由来はほとんど分らない。像内打付けの銘札は、慶長元年（一五九六）の大地震で塔が倒壊したあとの修理を意味するもので、地震よりも前からここにあったらしいと推測しうるにとどまる。また別に、この折の多宝塔建立の棟札（慶長十一年）が安楽寿院に保管されていて、そこに大日（毘盧舎那と記される）と阿弥陀を並記する文言が二、三見られる。これは二像並置の状態があるていどさかのぼることを示唆するものではあるが、この二像をならべる教義的根拠はないし、何といっても両像の製作時期にズレがあり、しかも大きさも安置状況も異なるので、対となる像ではない。

しかしそうはいっても、両像の製作時期にあまり大きなへだたりはない。阿弥陀如来像に比べて、やや細身を感じさせる体つき、低く平滑な衣文などのことから、大日如来像は少し下って十二世紀後半の造立が推定でき、しかもその品格あるつくりは、京都の作であることを雄弁に物語っている。阿弥陀如来像とともにならべられる必然性のないところからすれば、どこからか移されたとみななければならず、いずれか格式ある院家の旧安置が推測される。





第1図 阿弥陀如来像（左・近衛天皇陵安置、右・安楽寿院蔵）



第2図 阿弥陀如来像の面相部（左・近衛天皇陵安置、右・安楽寿院蔵）

### 三 安楽寿院像（本御塔像）との比較

ここまで、阿弥陀如来像と大日如来像の概要の記述と製作時期についての推定を行ってきた。ともに院政期の優秀な都仏で、注目すべき新資料であるが、とりわけ阿弥陀如来像は、その由緒正しきにより、美術史上に占める位置はきわめて高い。ここでは特にこの像を取り挙げ、安楽寿院にある本御塔像との比較によりいくつかの検討を加えたい。

本御塔が建立供養されたのが保延五年（一一三九）で、一方新御塔のそれは、前述したように保元二年（一一五七）頃である。そこに安置された阿弥陀如来像の各造立時期をそれぞれの起塔時に求めるならば、その開きは二十年弱ある。この間隔が造形的にも妥当なものかどうか、作品に即しながら次に考えてみたい。

本体の形状から比較すると、印相が、本御塔像が定印、新御塔像が来迎印となるところが顕著な違いであり、また新御塔像の両脚部中央に、着衣がエプロン状に垂れているのも異なる点として指摘できる。このほかに衣文など細部にも相違はあるのだが、まず最初に確認しておかなければならないことは、両像とも同じような等身の坐像であり、各部の寸法が同一規格といてよいほどの近似値を示すことである（本稿末に法量一覧を付す）。

光背・台座の形状がまったく同一なのは、天文二十二—二十三年（一五五三—五四）に両像が「両御塔本尊」<sup>(5)</sup>として同時に修理された結果で

ある。一部当初のものの残る台座でいえば、いずれも受座から下の部分が通常よりも小さく不安定な感じを与えるのは、ともに塔内の狭い内陣安置が最初からの計画であったことを推察せしめる。

以上の比較からいえることは、両像が一对のものとして製作されたらしいにもかかわらず、両手の印相と両脚部の衣の形式に目立った差違があることであろう。

阿弥陀如来の定印と来迎印は、本来、その成立事情やもっている意味は別個のものであったのだが、院政期になると、浄土教を密教的に解釈する風が広まり、定印の阿弥陀如来像に極楽往生を願うこともよく行われ、この両印相の区別があまり厳密でなくなったことは事実である。浄瑠璃寺の九体阿弥陀像の中尊像が来迎印、脇尊の八体が定印という組み合わせなのはその好例である。また新御塔像両脚部のエプロン状に垂れる衣は、どちらかといえば、来迎印を始めとする施無畏・与願印の系統の像によく見られるという傾向はあるけれど、必ずしも法則的なものでなく、例えば先と同じ浄瑠璃寺九体阿弥陀像というならば、定印を結ぶ脇尊八体のうち四体にこの形の衣が認められ、残る四体にはないのである。

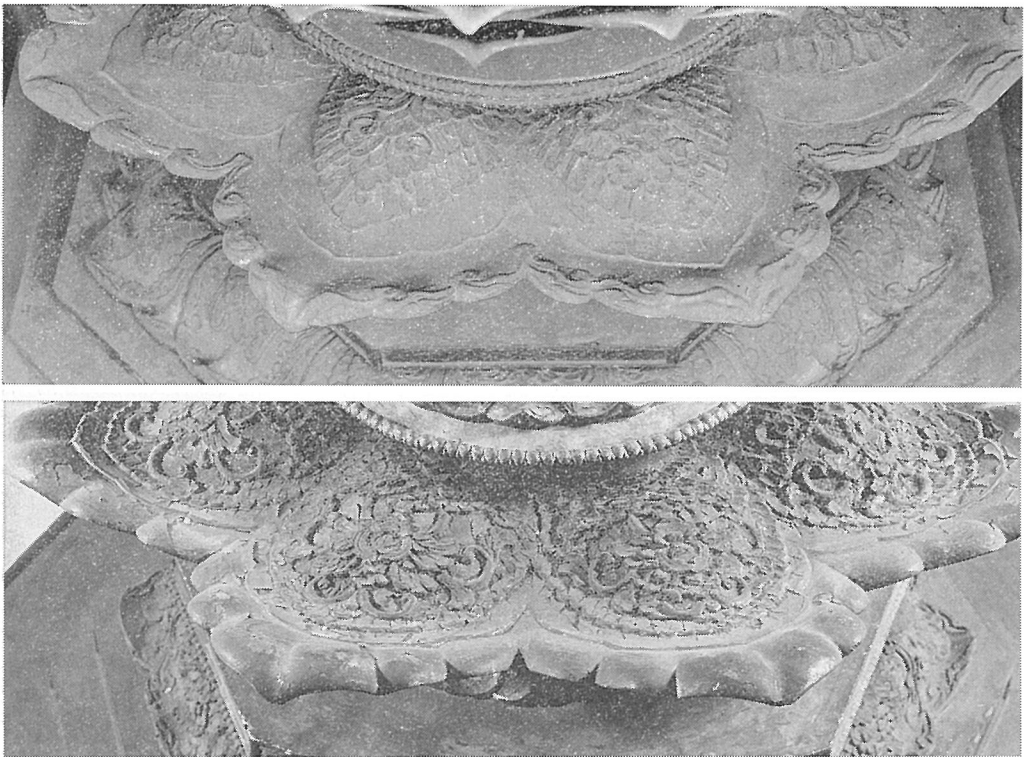
このように考えると、印相と両脚部の着衣に集中して見られるこれらの相違は、むしろ、一对のものとして図られたからこそその対比とみた方が正しいだろう。

ところが、両像のこのような相互補完的な性格にもかかわらず、造形

的にはなお、それとは意味の異なる相違点をいくつか指摘することができる。そのひとつは両像の作風の違いであり、本御塔像の面長・瘦身おもながの体軀に対して、新御塔像が太ったぶりとした体格であることは、だれでも気づくであろう。面相の表現は、表面の漆箔や彩色の後補に気をつけなければならぬものの、本御塔像が両目の位置が高いためにいくぶん理知的な面持ちとなっているが、新御塔像では両目が寄りぎみで、情緒的な趣きが強い。衣文にしても、本御塔像ではゆるやかながら小ぎみよく走り、膝頭にまで浅く刻まれているのに比べると、新御塔像のそれは、この頃の一般的傾向ではあるが穏やかなもので、要所要所にやや深くなるものの、膝頭では完全に消えている。これらの作風上の相違は、製作時期が二十年近く離れているとする見方に有力な根拠を与えるだろうし、ひいては、担当仏師が同一人か否かの判断にも影響をもたらす。

台座の浮彫り文様に着目しよう。両像に共通してそのある部分は、華盤（表・裏）と反花であるが、それぞれはお互いに似て非なるものである。

まず華盤の表だが、本御塔像では華盤各弁の根元に数個の宝相華をまとい、その上中央にひととき大きな宝相華（蕊を大きくあらわす）を置き、そこから六方に蔓が伸びるといふ珍しいもので、まわりを列弁帯と五頭葉形で括っており、華盤の縁は無文である。一方の新御塔像のその部分は、根元に宝相華があらわされ、まわりを列弁帯（二列）と五頭葉



第3図 台座華盤の文様（上・近衛天皇陵像、下・安楽寿院像）

形で括り、さらに華盤の縁は、波形に揺れるので一見雲のようだが、その実、花弁の反転とみられるものが巻いている。

華盤の裏は両像ともその根元に数個の宝相華をまとめるものだが、縁は、本御塔像は無文、新御塔像では花弁の反転が巻いている。

次に反花であるが、本御塔像のそれは全体で八方二段なのに対し、新御塔像では十六方二段と、倍の弁数となっている。またそれだけでなく各弁の文様構成も異質で、本御塔像は根元から大振りで賑やかな宝相華が出、そのまわりを列弁帯で括り、反花の縁に茶杓形となる弁の反転が一順している。ところが新御塔像では、複弁を意味する二個の複子弁が表現されるのが特徴的で、さらに根元から出る大づくりの宝相華がその上にかぶさっている。反花の縁は、やはり雲のような茶杓形の花弁の反転が巻いている。

文様の構成はこのように異質である。どちらかにより古様を指摘しうるほどの差はないのだが、新御塔像に複子弁があらわされるなど、どちらかといえばこの像はオーソドックスで伝統的な施文といえ、それに対し、本御塔像の文様は宝相華から蔓が出るなどのこともあり、多少変わっているといえるだろう。

両像の差違をさらに明瞭に示すのが、その木寄せ構造である。新御塔像のそれはすでに記述したので、それと比べて本御塔像の違っている点を中心に次に記す。

本御塔像は木造（ヒノキ材）、寄木造、彫眼、漆箔。頭・体の根幹部



第4図 台座反花の文様（上・近衛天皇陵像、下・安楽寿院像）

は耳半ばの位置で前後に矧ぎ寄せ、さらに頸部下方で頭・体を矧いでいる。この点が非常に大きな相違点であり、対比的にいえば、頭・体の根幹部が、新御塔像では正中と側面で、つまり材を前後左右に矧いでいたのに対して、本御塔像は側面だけで、つまり材を前後に矧いでいる。木寄せという観点からすれば両像にはまったく別個の発想が見られるのである。木寄せ法が高度に発達し、このていどの区別ならどんな仏師でも熟知していたはずのこの時代ではあるけれど、一對の仏像であるにもかかわらず、両者の間で造法が異なるということの意味するところは大きいといわなければならない。

ここで再び両像の製作背景を振り返ってみよう。次はこの間の動きを年表風にしたものである。

保延五年（一一三九） 本御塔供養

久寿二年（一一五五） 近衛天皇崩御

保元元年（一一五六） 鳥羽法皇崩御

同 二年（一一五七）頃 新御塔供養

永暦元年（一一六〇） （美福門院崩御）

長寛元年（一一六三） 近衛天皇遺骨を納む

二像の製作を各塔の供養時と同じとみれば、その開きは十八年あることとなり、作風や技法に窺いたいいくつかの逕庭を説明するには都合がよ

い。ところが一方、両像を当初から計画された一對の二像とみる意図の方に重きを置く立場からいえば、これほどの間隔は認めがたいだろう。後者の場合合理的な解釈は、本御塔像を鳥羽法皇崩御のときにつくられたものとし、新御塔像はこれに引きつづいて翌年の塔供養に合わせた造立とみることにあるといえようか。

どちらにも一理あるようだが、ひとつ後説の難をいえば、鳥羽法皇の御陵を築造しておきながら、埋葬施設の上に建つ塔が竣工以来十七年間も本尊不在だったという不自然さがあり、また、比較的長生だった法皇の不意の崩御にも備えなかったという不審も生じる。よって現段階では、両像の製作は、それぞれの塔の供養時に求めるのがもっとも適當ではないかと推考される<sup>(8)</sup>。いい換えれば、新御塔像はすでにある本御塔像を参考に、一對としての対比を図りながら、あとから製作されたものと考えられるのである。

最後に、製作した仏師の推定を行っておきたい。本御塔像に関しては何の直接的な手がかりもないのだが、この頃の鳥羽殿の造仏に広く携わっていた円派仏師がもっとも有力視され、小林剛氏は賢円<sup>(9)</sup>、武笠朗氏は長円工房<sup>(10)</sup>を主張した。確かに、法皇の御陵仏という高いレベルの要求される造仏だから、賢円・長円のどちらかがかわった可能性は強い。円派仏師を全盛に導いた父円勢のあとを承けて、それを継いだ弟子のうち、長円が長子で賢円は弟であった<sup>(11)</sup>（『長秋記』）。長円は長承元年（一一三二）に、賢円は保延二年（一一三六）にそれぞれ法印の極位に達



し、本御塔供養の頃、二人はそろって造仏界のリーダーであった。よって、法皇の御陵仏をつくる資格はともにじゅうぶんあるのだが、師であり父でもあった円勢の、太りぎみの体軀による親しみやすい作風<sup>(12)</sup>から離れて、瘦身に理知に走ったような本御塔像の表現や、やや変わった施文の窺える同像台座の文様などによって判断するならば、可能性として、直系ではない賢円作の方に分があるかという推測を、筆者は以前したことがある<sup>(13)</sup>。

新御塔像の担当仏師名も古い文献からは何も知ることができない。ところがさいわいなことに安楽寿院に残る近世の古文書の中に、その造立仏師として「願円」という名が出てくる<sup>(14)</sup>。どのような資料を参考にしたのかは不明だが、この頃実際に元円（賢円の弟子）という仏師が存在しており、名前の発音の同じになる（ともに発音は「グワンエン」）両者の関係に興味が惹かれる。久安三年（一一四七）に安楽寿院九体阿弥陀堂の仏像を長円が造立したとき、元円はその造仏賞を譲られて法橋となつている（『本朝世紀』）。これが文献に現れる元円の唯一の事績なのだが、一般的にいつてこの時期仏師の法橋叙任が三十歳でいどだから、新御塔供養の頃、彼は四十歳前後の活躍期だったに違いない。

長円は久安六年（一一五〇）に没しており（『本朝世紀』『外記日記』）、また賢円は久寿二年（一一五五）の造仏記事（『兵範記』）のあと消息が途絶えており、高齢から考えて彼もまた間もなく没したものとみられる。よって新御塔像の造立にこの二人はかかわっておらず、したがって

この像の造立仏師として、「願円」が元円との音通により記されたとの推定に高い蓋然性が出てくる。だとすればここに、円派仏師の貴重な基準作例がひとつ加わったことになる。

## 結 び

鳥羽法皇の父白河法皇は、崩御（大治四年・一一二九）のちやはり塔に葬られた（『中右記』）。鳥羽の成菩提院に築かれていた三基の塔のうち、天仁二年（一一〇九）に完成した三重塔がこれに当ると考えられている。つまり、鳥羽法皇や美福門院（実際は近衛天皇）の場合と同じく、生前に自らの墓所として塔を用意し、そして実際そこに葬られたのである。この塔は、その後身さえ現存しないので、何が本尊とされたかは知られないものの、ここへの拝所のような役割だったと推定される御所に阿弥陀三尊像が安置され、仏後壁には九品曼荼羅図と補陀落山図が描かれていた（『長秋記』）。またさらに、法皇の骨壺を納めた石組みの蓋の上には、銅経などともに小塔が置かれ、その中に阿弥陀如来像が安置されたのである（『長秋記』）。阿弥陀関係の造像の多さからいって、白河天皇陵三重塔にまつられたのも、鳥羽天皇陵・近衛天皇陵の各塔本尊と同じく、阿弥陀如来像だったと考えて間違いないだろう。

白河法皇以降、讓位ののち出家される上皇が多くなった関係で、御陵に仏教的な施設が建てられるようになった<sup>(15)</sup>。陵墓史上一直期をなす変化である。遺骸を阿弥陀如来像安置の塔に埋葬するという特殊な形式が、

鳥羽離宮の中で相接近して、しかも白河・鳥羽・近衛という相近い三代の法皇・天皇にだけ見られるという現象や、また、地勢に影響されない平地での造営であるにもかかわらず、本尊が西方浄土の教主であることを意識してか、いずれの陵墓も東面していることなどは、仏教との特殊な関連を示唆するものとして興味深い。

崇徳天皇と安徳天皇の各御陵に仏堂が築かれたのは、ともに崩後の建久二年（一一九一）のことであり（『玉葉』）、翌三年崩御の後白河法皇の御陵には、生前から法華堂が建てられていた。法華堂は以後の天皇陵にしばしば設けられるようになるけれど、本尊はすでに阿弥陀如来ではない。<sup>(16)</sup>

埋葬施設の上に塔を建て、そこに阿弥陀如来像を安置することは、このように時期的に限られた事象である。その意味で、本御塔・新御塔の両阿弥陀如来像が今日まで伝え守られていることの意義は、きわめて大きい。

法量（単位センチメートル）

	本御塔像	新御塔像	大日如来像
像高	八七・一	八六・六	五六・三
髮際高	七五・七	七五・二	四六・〇
頂一顎	二八・〇	二七・七	二一・三
面長	一六・六	一六・〇	一〇・二

耳張	二一・八	二二・六	一三・一
面幅	一七・一	一七・三	一〇・四
面奥	二三・〇	二一・一	一二・六
臂張	五三・八	五五・四	三〇・七
胸厚	二三・六	一七・九	一三・七
腹厚	二五・八	二五・一	一七・〇
座奥	四五・六	四六・一	二七・二
膝張	七二・一	七一・〇	四二・一
膝高（左）	一三・四	一五・〇	八・八
膝高（右）	一四・五	一五・二	八・五

注

- (1) 『安楽寿院南陵多宝塔修繕工事略誌』
- (2) 前記『修繕工事略誌』によれば、この時の完全な新作部分は、本体では裳先、台座では上敷茄子の下の反花、下敷茄子とその下の反花、受座、下框。
- (3) 古代学協会・古代学研究所『平安京提要』五六三頁（角川書店 平成六年）
- (4) 杉山信三『院家建築の研究』二二六―二二七頁（注42）（吉川弘文館 昭和五十六年）
- (5) 奈良国立文化財研究所『日本美術院彫刻等修理記録』VII（昭和五十五年）「本御塔」  
 天文廿二年始自九月廿六日仏工浄心法師以無二之  
 懇志励果日之功勞兩御塔本尊奉修覆之御光并  
 蓮華座依有損壞新刻彫之磨黃金奉莊嚴尊像  
 者也当住禪衆等同有緣衆以奉加之志遂其功

訖

同廿三年六月二日 記之

- (6) 『修繕工事略誌』七七頁、および『城南—鳥羽離宮址を中心とする—』三四二—三頁(城南宮 昭和四十二年、以後『城南』という)に全文が掲載されている。

(7) 古記録などに、鳥羽殿内でこれに該当しそうな像の記載はない。

- (8) 本御塔像の造立時期について、小林剛「仏師法印賢円」(『大和文華』二一 昭和三十一年、『日本彫刻作家研究』所収)では保元元年(一一五六)の鳥羽法皇崩御のとき、西川新次「藤原彫刻」(『原色日本の美術』六 『阿弥陀堂と藤原彫刻』小学館 昭和四十四年)は保延三年(一一三七)の安楽寿院御堂の供養時、武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」(『仏教芸術』一六七 昭和六十一年)は同五年の三重塔供養時としている。本像は三重塔(本御塔)安置の像なので、武笠説が妥当と思われる。

(9) 注8の小林論文。

(10) 注8の武笠論文。

(11) 「仏師長円父子、弟兼円等」と記されるが、兼円は賢円のことであろう。

- (12) 伊東史朗「仁和寺旧北院本尊薬師如来檀像について」(『仏教芸術』一七七 昭和六十三年)

(13) 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」(『院政期の仏像—定朝から運慶へ—』岩波書店 平成四年)

なお、賢円が鳥羽勝光明院阿弥陀如来像を平等院鳳凰堂像に倣って造立したとき、法皇らの批判により、ほかの著名な古像をも参考にしてつくり直したと(『長秋記』)は、賢円の作風が、当時の一般的な風から離れることを意に介しない、独自性のあるものだったことを物語っている。

- (14) 新御塔像の造立仏師について、安楽寿院古文書の中に「仏子願円くわんえん歎」とあり、また『城州紀伊郡竹田安楽寿院原要記』に「或曰仏工願円之所造也」とある(いずれも『城南』所収)。

(15) 『城南』一四三頁

- (16) 伊東史朗「妙法院普賢菩薩騎象像について」(『仏教芸術』一九四 平成三

年)では、この普賢菩薩像が後白河天皇陵(法住寺陵 法華堂の当初の本尊だったかと推定している。





阿弥陀如来坐像





大日如来坐像



阿弥陀如来坐像



大日如来坐像

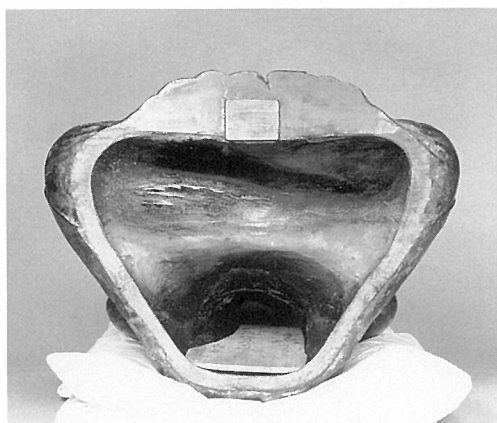




(左侧面)



(右侧面)



(像底)



(背面)

大日如来坐像